

市民協働のまちづくりに向けて

市は、本田敏秋市長が現地に向き、地域課題について地域住民と直接意見交換する平成十八年度「市長と現地で語る会」を開催しました。同会は、六月二十日から七月十日まで市内十一地区で行われ、本田市長が現地を視察し、地域住民らと課題解決の糸口を探りました。その中で、新しい市のまちづくりの方向性の一つとして定めている「市民と行政の協働」の動きも見えてきました。今回は、現地視察の状況と市民協働の実践例を併せて紹介します。



現地の状況を地域住民から聞く本田敏秋市長(右から2人目)

視察箇所は約130カ所

合併する前の旧遠野市は、平成十四年度から本田市長が各地を回り、直接地域住民と意見を交換する「市長と語る会」を開催してきました。その回数は、合併後に開催したのも含めると平成十八年六月末現在で八十五回を数え、参加延べ人数は二千六十二人、寄せられた意見や提言は千六百四十四件に及びます。今回の「市長と現地で語る会」は、これまで各地で行ってきた「市長と語る会」などが出された意見や提言を實際に現地視察し、今後の市政に反映させるために開催されました。

遠野町地区を皮切りに六月二十日から始まった現地視察は、七月十日まで各町単位(宮守町は、宮守、鱒沢、達磨部の三地区)で行われ、その視察箇所は約百三十カ所。視察先で出された意見や提言は、市の遊休施設の活用策や老朽化した施設の改修、道路・水路の補修など、施設にかかわる内容が中心でした。

視察終了後、本田市長と各部長、地区センター所長らによる現地視察総括会議を開き、それぞれの案件を▽総合計画に反映するもの▽すぐに取り組むもの▽地域住民の協力を得るものなどに整理しました。その整理した内容を報告書としてまとめ、八月末をめどにそれぞれの地区へ配布する予定です。

市民協働を実践

今回の現地視察で新「遠野市」が進める市民協働のまちづくりに呼応する動きが見えてきました。青笹町の上糠前自治会(菊池



地域住民が自ら整備した水路

一男会長、四十二世帯は、地域課題であった老朽化した農業用水路を市が保有する中古のU字溝を活用して改修を進めていました。

改修している農業用水路は、同地区を流れる「立石水路」の三方所、総延長約178m。この水路は、昭和二十年ごろに石積みや素掘りで整備されたもので、老朽化が進み大雨の際には水田に水があふれるなどの被害が出ていました。

同自治会は、下流の善応寺自治会と連携して、水田への取水や河川清掃の時期に地区民総出で水路の泥上げを行う一方、市へ改修要望を続けてきました。しかし、財政難から一向に進展する気配はなく、自治会側は「水路機能維持のために早急な改修が必要」と自力で工事する

ことを条件に市から中古のU字溝八十六本を無償で譲り受けました。改修工事は四月下旬から五月上旬にかけて、住民がバックホーなどの重機で水路を掘り、譲り受けたU字溝のうち五十六本を使って一期工事分約118mを整備。残りの60mは、秋じまい後に実施する予定です。

自治会の支出は、U字溝の運搬費として一本当たり五百円だけ、そのほかはすべて地域住民のボランティア。菊池会長は「先輩たちが築いた地域のつながりがあったからできたこと。昔と違い陳情すれば、どうにかなる時代ではなくなった。自分たちができることは、自分たちでやっつけていかなければならない。こういうことが市民協働だと思う」と話していました。

老朽化した2施設を改築、地域ぐるみで子育て環境を整備

木のぬくもり感じる上郷小

上郷小学校(千葉やよひ校長、児童百四十一人)の第一期校舎改築工事が完了し、六月二十六日から新校舎での授業が始まりました。木のぬくもりを感じる真新しい校舎で、児童たちは気持ちも新たに勉強に励んでいます。



地場産材をふんだんに使用し完成した上郷小学校

新校舎は、地域住民でつくる「明日の上郷小を創る会(佐々木善次郎会長)」と改築規模、位置、機能などについて協議を重ね、基本コンセプトを①温かみと潤いのある学習環境②機能的で分かりやすい動線計画③人の目が行き届く「安心・安全」の学校④上郷らしい「風格」を表現⑤地域に開放的で親しみの持てる校舎の五つを柱に設計しました。地場産材をふんだんに使用した校舎は、木造一部鉄筋コンクリート造り二階建て。延べ床面積約3031平方メートルのうち、第一期工事として2754平方メートルが完成。環境負荷の低減と児童

の環境教育の観点から、市内の小中学校で初めて暖房用熱源にペレットボイラーを採用しました。今後、太陽光パネルと風力による小型発電照明装置も設置される予定です。校舎、屋内運動場整備などを含めた総事業費は約十億二千五百万円を見込み、本年度中に旧校舎の解体、第二期分の校舎改築、新しい屋内運動場の整備が行われます。

県内初の合築方式 青笹保育園

県内で初めて保育園と児童館の合築施設として整備された青笹保育園(菊池節子園長、園児八十六人)と青笹児童館(青山清志館長の落成記念式典は七月十九日、同施設で行われ、式典に出席した関係者ら約百四十人が、子育て支援の中核となる施設の完成を祝いました。

式典に先立ち本田敏秋市長、市保育協会の菊池昶理事ら関係者がテープカット。

式典で本田市長は「合築された施設を中心とする地域の特性を生かした個性と魅力ある地域づくりを目指す『子育て支援モデル地区』が確立されました。子どもたちの『生きる力』を育てるためには、豊かな体験が不可欠であり、今後、保育園、児童館、地域の果たす役割はますます重要となつてきます」と式辞を述べました。

式典後には、青笹保育園すみれ組(年長の園児十六人とその父母らが「親子青笹しりとり」を披露し、落成に花を添えまし

た。改築された保育園は市保育協会、新築された児童館は市が整備。敷地面積1万2千平方メートル

合築した施設は木造平屋建てで、保育園分の床面積は約664平方メートル。児童館分は約306平方メートル。事業費は保育園分が約一億五千六百万円、児童館分が約六千三百九十万円。青笹地区は、小・中学校、地区センター、駐在所などが集合している地域です。この中に乳幼児、児童館の拠点として保育園、児童館を合築することに

より、相乗効果を創出し、周辺施設機能の連携による地域ぐるみの子育てができることを期待されています。また、核家族が増加し、異年齢児童間の触れ合いが少なくなっている中で乳幼児から学童までが「地域のきょうだい」として共に活動できることや施設職員相互の連携による効果的な運営、共有スペースの設置による効果なども期待されています。

児童館は一日平均約四十四人の児童が利用しています。小学



施設の落成を祝い関係者がテープカット